

追悼

御法川誠次郎教授の学徳を偲ぶ

水野 修次郎

財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センターの御法川誠次郎教授のご逝去を悼み、この紙面を借りて教授の業績と思い出を振り返りたいと思います。

御法川教授は、東京成徳大学大学院の修士課程でカウンセリングや臨床心理学を学び、ご卒業後に試験を受けて臨床心理士となりました。主要研究テーマは「癒しと心身関係に対する心理学的アプローチ」です。主な著作は以下です。

著書「教育人間学的カウンセリング」（『道徳・教育・経済』所収）、一九八三年。

論説「自我没却の心理学的意義」『モラロジー研究』四四号、一九九七年。

論文「癒しについての研究」『モラロジー研究』四五号、一九九九年。

論説「モラルという言葉の最近の展開をめぐって」『モラロジー研究』四九号、二〇〇一年。

論文「クライアントからの報告『癒されたという感じ』について」（『臨床心理学研究』東京成徳大学、

第二号)、二〇〇二年。

論説「自我没却をした生き方——あるモラロジアン事例から探る——」『モラロジー研究』五〇号、二〇〇二年。

論文「あるワークショップへの継続的参加の動因と“癒されたと感じる”要因」(『カウンセリング研究』第三六卷第二号)、二〇〇三年。

論文「モラロジー・カウンセリングの確立を求めて」『モラロジー研究』六一号、二〇〇八年。

これらの主な業績から推察できるように、御法川教授は「癒し」と「モラロジー・カウンセリング」に関心を持ち続けていました。

御法川教授は「癒し」の本質を自己癒しと看破し、それを起動させる要因を「イメージ」と「つながり」と論じています。また、癒しのプロセスには段階があり、「症状への働きかけ」から「根源における癒し」に進むとしています。そして「健康」状態となり、「他者への奉仕」への段階と進むとします。

ところが、「癒し」には落とし穴があります。特定の信念によって癒されたという思い込みが生じると、自分の心の傷から目をそむける傾向が生じます。いわゆる受身的な神頼みの癒しがこれです。真の癒しには、生き方を変えて主体的に生きる自己癒しが必要になります。最後に御法川教授自身も癒しを求める決意を語ってこの論文を締めくくっています。

また、「自我没却の心理学的意義」という論文では、エゴイズムに囚われた人間の心づかいについて論じています。エゴイズムを作り出す根源は、自己中心性、模倣、反復、投影であるとして分析しています。そ

して、自我への対象方法をゲシュタルト・セラピーの人間観にそのヒントを得ています。人間には対立する二つの心の葛藤があります。つまりトップドック（タテマエ）とアンダードック（ホンネ）という心が、上下関係を作り、他方を押さえつけるのです。心理学的課題は、この二つの心を対等に対立させることです。そうすることによって、自分が見聞きすることすべて自分の心の状況と何らかの関係があるという意識を得ることができるのです。自我を没却することによって、この心の葛藤や対立を超える生き方が可能となります。一般には、トップドックのみを強化して葛藤を解決する方法が主体となっていますが、これでは、心の葛藤を引き受ける覚悟ができていないことになります。責任ある人生を生きて、主体的に決断するために、自立的、自主的に生きる人間を育成する必要があります。その有効な方法が自我没却であると論じています。

次に、御法川教授の最後の原稿である「モラロジ・カウンセリングの確立を求めて」について触れましょう。ここで特に言及したいのが、モラロジ・カウンセリングの人間観です。まず始めに、意味の探求があります。この世の出来事はすべて意味があると考えます。次に日々の生活の実現があります。それは、人は共に助け合うものであり、他者に対する深い思いやりが自分を豊かにするという確信です。感謝し生きるという心の持ち方によって、安心感や満足感を味わうことが可能になります。「とらわれの心」から解放されて、自分を省みる心を養うことが可能になります。自己と他者とのつながりが意識できると温かい気持ちとなり「感謝生活」に結びつきます。感謝はストレス受容を増し、免疫性を高めます。時代を通して命のつながりを感じると、人は生きる力が増すものです。それが結局、自己、他者、社会をも安心させて満足させる結果となります。これが本当の三方善であると説きます。

御法川教授は、モラロジー・カウンセリングの具体的展開についても意見を展開させています。おおよそカウンセリングプロセスの展開をベースにして展開されていますが、最終段階に「新たな生き方の創造・確認」という提案をしています。この段階では、今までの生きかたとはまったく異なったレベルでの生きかたとなります。この論文の最後に、モラロジー・カウンセリングの特色として「祈り」について述べています。愛を深める行為が「祈り」なのです。相手を真に尊重し、相手をそのまま受容し、真の利他愛を感じるのは祈りの中で実現します。また、大いなるものに抱かれて安心することも可能となります。

このように御法川教授は一貫してカウンセリング学をベースにして応用モラロジーを確立しようと努力していました。その興味関心は、アレクサンダーテクニク、野口体操、さらにTFIT (Thought Field Therapy) に及びます。TFITは、日本語にすると「思考場療法」といいます。米国心理学のロジャー・キヤラハン博士が一九七〇年代の終わりに発見し、鍼のツボをタッピングすることで心理的問題の症状を改善させていく画期的な治療法です。また、ハコミセラピーにも関心をもって学習をしていました。これは、仏教瞑想的な「マインドフルネス」という意識状態を活用するセラピーのことです。

意識や身体性を追求していた教授にとって、自身の体調の変化も敏感に感じ取っていたことでしょう。家族のお話では体に留意して健康管理には一番気にかけていたということです。それゆえに健康に対する自信もあったことと思われます。教授の説くように人生はどのようなことが起きるか予測できません。自己の病に対するセラピーを最後の挑戦と感じていたことでしょう。人生の試練に意味を見出し、感謝して安心することが教授の説いていたセラピーの原点であります。まさに身を挺して実証したなと今さらながら感慨深くその意味を味わっています。

御法川教授は、六〇歳という比較的若い年齢で逝去され、研究の完成を見ることなくこの世を去られました。教授の残された課題は、教育研究室に受け継がれることでしょう。課題は以下です。

- 一、モラロジー・カウンセリングの理論研究
- 二、心と身体の関係の研究
- 三、自己反省の研究
- 四、癒しの研究

まず、モラロジー・カウンセリング理論を確立することが研究の優先事項でしょう。応用モラロジー学としてカウンセリング理論の一つとして学問の発展に貢献できると確信しております。次に、心と身体の関係と癒しについて研究を進める必要があります。心の傷つきや心遣は、その人の人生に大きな影響を与えます。これが学問的に分かり易く展開できることが求められます。

さらに、自己反省研究の展開がモラロジー・カウンセリングの確立の核となるでしょう。心理学の枠組みで、自己反省理論が解明できれば、これも学問への貢献と人類の幸福に寄与することになります。以上の研究課題を引継ぎ、継続して研究することを誓って、教授の冥福を祈りたいと思います。